

自然物「虫」

芳賀 真希子

しろぐみ

テーマとした理由や背景

クラスの活動の中で虫に興味を持っている子どもが多い。
そこから虫の種類や好む場所などにも繋がっている。
実際に公園や施設に行き本物に触れることでどのように変化して
いくか、違う見方から更に好奇心や探究心を育んでいくためには
どのような保育者のアプローチが必要か探っていきたいと思った
ため。

活動名1 虫の世界

(7月中旬)

期待する経験

- ・ 虫の住む場所を話し合う。
- ・ 作った虫を飾り、世界を広げていく。

環境設定

- ・ 絵本
- ・ 絵の具、新聞紙



子どもの様子や言葉

- ・ 「虫は葉っぱのある所にいるよ。」 「土の中や影にいる虫もいるよ。」 「木にいる虫もいるよね。」 など経験から様々な意見が出てきた。
- ・ 友だちの話を聞いて、「木がたくさんある所には虫もたくさんいるよ。」 という意見が出て「木の多い所ってどこかな？」 と尋ねると「森だよ。森にはカブトムシもセミもいるんじゃない？」 とみんなの思いが一致し、森を作ることになった。

振り返り（気づき、省察、考察）

自身として

- ・ 全員の思いが同じになることはないので、それぞれが感じることをすり合わせる大切さをあらためた感じた。

クラスとして

- ・ 思いは違くても、向かってる先は同じように感じた。子どもの興味、関心を持続し、また新たな気づきにつなげられるようにしていきたい。

活動名2 広がる虫の世界

(8月上旬)

期待する経験

- ・ 虫が住む場所を探求する。
- ・ それぞれが思う表現を楽しめるようにする。
- ・ 仲間と協力して作っていく。

環境設定

- ・ 絵本、図鑑
- ・ 絵の具、新聞紙
- ・ テープ、空き箱、モール



子どもの様子や言葉

- ・子どもから「虫の世界の続きがやりたい」と意欲的な声が多くなった。
- ・毎日暑くて外に出られなかったなので、絵本や図鑑などで虫への興味を深められるようにしたため、夜に活発な虫や沼や川にいる虫にも気づきがあった。そこから夜の虫の世界や沼の虫の世界も広がっていった。



振り返り（気づき、省察、考察）

自身として

- ・ 厳しい暑さで外に出られず本物に触れる機会が少なかった。
- ・ イメージしたものを形にすることが苦手な子への配慮に気づきがあった。

クラスとして

- ・ 作ることに苦手意識があった子も仲間や保育者と一緒に段階を踏んでいくことで、自信になり、作ることを楽しんだり、より本物に近づけようと探求する姿が見られた。

活動名3 虫探し

(8月下旬)

期待する経験

- ・ 本物に触れる機会をつくり、そこからの気づきや変化をどう遊びに広がっていくか。
- ・ 虫への興味、関心を深める。

環境設定

- ・ 虫あみ、虫かご、虫眼鏡



子どもの様子や言葉

・公園内では虫を夢中で追いかけて、クモをチョウチョとバッタが入る同じ飼育カゴに入れたので、どうなるのかと一緒に観察していると、「バッタとチョウチョがクモから離れているね。」と気づいている。「なんでだろうね？怖いのかな？」と尋ねると、「後から入ってきたからドキドキしているだけだよ。すぐに友だちになれると思う。」という話にみんなで大笑い。「園庭に戻ったら虫も外に逃してあげるね。」と決めていた。

・虫メガネがついていて大きく見える観察箱にチョウチョを入れて見てみると「目が飛び出しているね。」「黒い模様が見えたよ。」と。すると「このチョウチョをすぐに作ってみる。」と製作コーナーで作り始める子もいた。

振り返り（気づき、省察、考察）

自身として

- ・ 図鑑や絵本などでは知ることができなかった気づきがあり、子どもたちの虫に対する考え方や見方が少し変わってきたように感じた。

クラスとして

- ・ 本物を見ることで更に興味、関心が深まる子もいたが本物は怖いと感じる子もいて、個人差はあった。

活動名4 虫取り鬼ごっこ

(9月上旬)

期待する経験

- ・ 虫への興味、関心から遊びが広がっている。そこからの気づきや展開を探っていく。
- ・ 遊びのルールを子ども同士で相談し、作ってほしい。

環境設定

- ・ フラフープ、虫あみ



子どもの様子や言葉

・虫への興味、関心は深まっていた。クラスでは鬼ごっこも人気だったのでみんなが虫になって、鬼役が虫とり網を持って追いかけるというしろぐみオリジナルの遊びが出来上がった。虫とり鬼ごっこを試してみるとフラフープで休憩場所を作ったり、鬼は虫とり網を持つなど遊びながら次々とアイディアが出てきた。

フラフープを園庭の離れた場所に移動している子に「どうしたの？」と声をかけると、「だってね、休憩場所が離れてる方が楽しいと思ったんだ。」とのこと。休憩場所を近くに設定していたので、すぐにそこに逃げ込まれ、なかなか鬼が捕まえることができなかったことに気づいたようだった。

振り返り（気づき、省察、考察）

自身として

- ・子どもが答えを見つけることを待つ大切さを改めて実感した。仲間と共に試行錯誤していく経験を積んでいきたいと感じた。

クラスとして

- ・子どもがルールを自分たちで決めたことで休憩場所を近くに設定していたので、すぐにそこに逃げ込まれ、なかなか鬼が捕まえることができなかったことに気づいたのだ。

活動名5 楽器遊び

(9月下旬)

期待する経験

- ・ 秋の虫にも興味を持つ。
- ・ 楽器遊びを楽しむ。

そこから遊びを広げていける
ようにする。

環境設定

- ・ 虫の写真
- ・ 楽器



子どもの様子や言葉

- ・ 保育者が虫の声という歌を打楽器でリズムを取りながら歌う。

「聞いたことがない虫がいっぱい出てきた。」と楽器を持って鳴らしてみる。すると「こおるぎはリンリンって鳴くんだね。」「チンチロチンチロって面白い。」と楽器で虫の声を鳴らす。子どもの表情がイキイキしていたので、そのまま秋の虫リレーを提案し、遊んだが楽器や虫の名前を覚えていなかったので、「わからないからつまらない。」との声があがった。

振り返り（気づき、省察、考察）

自身として

- ・ 楽器遊びは保育者から提案したが、興味を持っていた。初めての活動でリレーまで発展させたのは難しかったので、段階を踏んでいくべきであった。

クラスとして

- ・ 音の面白さやみんなで合わせた時の心地よさを感じ始めていた。実際の虫の声を聴き、音で表現する面白さも味わっていきたい。
- ・ アレンジリレーをしたことで、イメージしやすくなり、様々な思いを巡らせていた。

活動名6 外の日へ向けて

(9月下旬)

期待する経験

- ・ お家の人と一緒に遊ぶために工夫することやルールなど、子ども同士で考えていけるようにする。
- ・ 仲間と力を合わせる楽しさを味わう。

環境設定

- ・ ベンチ、フラフープ
- ・ 絵の具、クレヨン、画用紙



子どもの様子や言葉

・改善したしろぐみりレーをして遊ぶ前に子どもたちに「外には準備するものがいっぱいあるよね？先生たちだけで準備するのは難しいと思っていて。」と伝えると、「私たちができるよ。子どもたちみんなでやればいいんだよ。」「外の日は、パパも来るから大丈夫だよ。力持ちだから。」と頼もしい声があがる。そこから誰が何を準備するか、役割分担をすることに決まった。

振り返り（気づき、省察、考察）

自身として

- ・子どもに任せるところと保育者の思いをどこまで語るのかの見極めが必要だと感じた。

クラスとして

- ・日々の活動の中で、自分もこの仲間たちのために何ができるかを考える姿が増えてきたように感じた。
- ・個人差がある中で、役割を決めていくと、それぞれが任せられたというやる気につながっていった。

活動名7 外の日

(10月上旬)

期待する経験

- ・ 仲間やお家の人と虫の世界観を味わいながら遊ぶことを楽しむ。

環境設定

- ・ 楽器
- ・ 手作り衣装、手作り虫あみ
- ・ フラフープ、平均台
- ・ 虫カード



子どもの様子や言葉

- ・ 虫の塗り絵から始まった、虫への興味が、虫とり、観察だけにとどまらずに、製作、楽器遊び、運動遊びへと広がっていった。外の日では、親子で虫になりきり、鬼ごっこやリレーを楽しんだ。虫絵カードを見て、本物になりきった動きを思いっきり楽しんでいる姿もあった。

- ・ 虫というテーマで進めてきた外の日それぞれの役割で進めたのだが、同じ目的に向かって一緒に取り組む面白さを実感したようだった。

振り返り（気づき、省察、考察）

自身として

- ・ ある程度の計画を立てていても子どもの声や興味で変化していった。ゴールがないからこそ、子どもと共に様々な方向へと変えていける面白さを実感した。

クラスとして

- ・ 今までは個々に進めていた子どもも、楽しかった思いを共有していくことで仲間への信頼、居心地の良さを感じ始めていた。
- ・ 季節の移り変わりと共に木々の変化や虫の種類の違いにも気づいていた。

全体の振り返り

子どもの日常の遊びから、クラス活動へと広がっていった虫の世界。保育者が思い描く視点を遥かに超えていく子どもの気づきや発想力に驚き、共に探求していった。虫の塗り絵（トンボ、チョウチョ）を飛ばせてみたいという子どもの声から始まった。虫はどこに住んでいるのか？虫の目はどこにあるの？そんな疑問を投げかけ、図鑑や絵本、または実際に散歩に出かけ本物に触れるきっかけ作りで、外の日という行事まで広がっていった。虫というテーマから製作、運動遊び、楽器遊びまで広がっていったが、探求するという点においては、足りない部分もあったのではないかと感じている。園内にとどまらずに、専門家の話を聴いたり、見たりする機会を作り、子どもがまた新たな発見をするきっかけ作りはしていく必要があったのではないかと思う。